

距離を越えた先に

宮城県

養志館

中学2年 大沼まこ

あの夏、養志館は、師範の提案で石川県羽咋市に向かいました。小中学生合わせて十二人の剣士は、たった数時間の練成稽古のために、約六〇〇kmの距離を、九時間もかけて移動しました。そんなに遠くへ行かなくても稽古の相手は県内にも大勢いるのに、師範は石川へ行くことにこだわりました。出発は朝五時、石川県羽咋市の武道館に着いたのは午後二時過ぎ。出迎えてくれた邑知少年剣道教室の北江先生が師範との再会を喜んで、固く手を握り合っていた姿は印象的でした。これが、師範がここに来ることにこだわった理由なのかな、と漠然と思いましたが、本当のねらいは、稽古の後に知ることとなりました。

何年も前、北江先生が何気なく見たホームページに、師範が竹刀を構える姿がありました。その構えに惹かれた北江先生は、ねんりんピックで石川県を訪れた師範に声をかけたと言います。いつか共に稽古をしましょうと、剣道を通しての小さなつながりができました。そして数年の後、あの東日本大震災が起きたのです。宮城県の惨事を知った北江先生は、剣士を連れ、災害ボランティアとして宮城県入りしました。師範は邑知のみんなを歓迎しました。以来五年にわたり、毎年、災害ボランティアを行い、ほんの二時間ばかりの交流稽古を続けてきたのです。毎年毎年、訪れるたびに少しずつ復興していく宮城県の様子に、北江先生はいつか師範の道場を羽咋に呼びたい、と願うようになりました。そして六年目の夏、私達が羽咋を訪れることになったのです。稽古後の交流会では、さらに驚きました。邑知の剣士達は、五年間の宮城県訪問を、ただの体験で終わらせたくない、羽咋市役所に市長を訪ねたというのです。被災地宮城ではどんなことが起こったのか、何が必要なのか、自分達ができたことは何なのか、これを羽咋市でどのように生かしていけるのか。市長に伝えたそのままを、私達にも聞かせてくれました。東日本大震災からもうすぐ十年なろうとしている今、被災地に住む私達でさえ、あの日、大惨事が起きたことを忘れて過ごす日が多くなりました。ともすると、震災とか復興とかを取り上げるのはもういいのではないかという風潮を、感じることもあるくらいです。それを遠く離れた石川県の剣士達が、「忘れてはならない」と語ってくれていることが、胸の奥に強く刺さりました。師範が、どうしてもここに来たかった理由は、これだったのです。偶然出会った指導者同士の小さなつながり。大きな災害の中に

あつては、剣道というスポーツはあまりに小さな存在かもしれないけれど、その精神は、細く、でも確かな強さで五年間続き、六年目に結びついた。これを私達に見せたかったのだから、この思いを感じさせたかったのだろうと思いました。

私は「絆」という言葉が好きです。でもそれが、こんなに深い意味を持っていると考えたことはありませんでした。邑知の剣士と剣を交え、交流を続ける中で、はじめて実感できたのです。

翌年はまた、邑知のみんなが仙台にやって来ました。今度はもう一つの道場の仲間たちを連れて。七年目の絆です。今年もまた、来年会うまでに、もっと強くなろうと約束を交わして別れる。距離は遠く離れていても、七年目の絆が加わったから、より固く結ばれる、これが本当の「絆」。

新型コロナウイルス感染症との戦いを強いられている今、人との関わりが制限され、ふれあいや助け合いの心が発揮されにくくなっています。それでも、六〇〇kmの距離にあり、手を取り合うことができなくてもお互いを応援し合ってきた邑知と養志館の剣士のように、心を通わせ、相手を思い、自身を高める努力はできるはず。そういう、距離を越えた先にある絆こそ、大切にしたいと思うのです。